

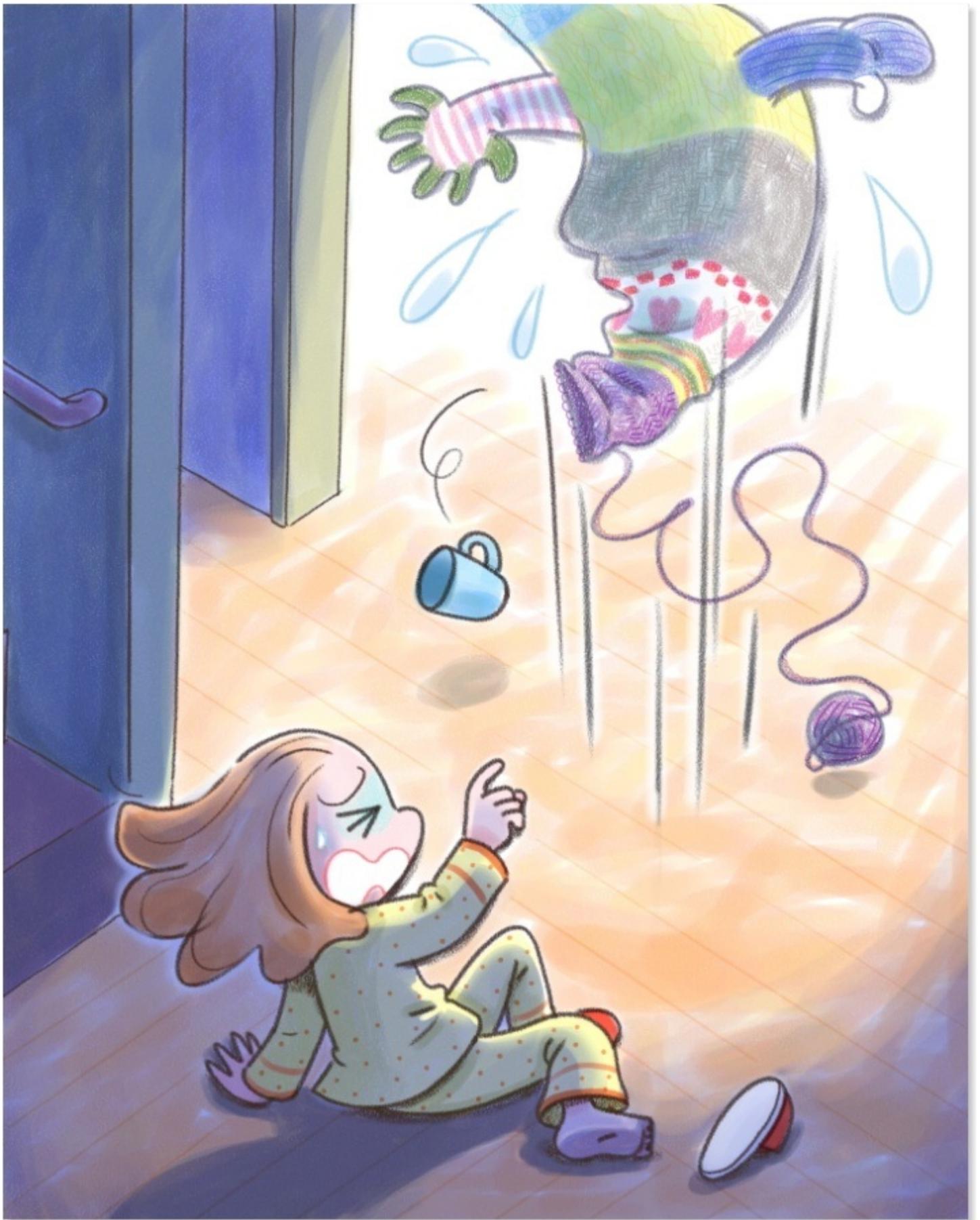
あたたかおバケの
もふもふいさん





夜中にのどがかわいて目がさめたルミが
キッチンに行こうとしたとき
小さなものが聞こえてきました。
だれかがれいぞうこのドアをあけています。
そしてそのだれかは

ゆかの上にふわふわとういているのです！



「きゃあ~~~~~！！」

ルミが思わず大きな声でさげんだら
なぞのだれかさんもびっくりして
てんじょうまで飛びあがりました。
水色のカップがゆかの上に落ちて

ゴン！と大きな音がしました。



『ご、ごめんなさい！わたしはオバケ ココアがのみたかっただけなんです・・・』

「ええっ？ほんとうにオバケ？あんまりこわくないけど・・・」

オバケはちょっとにっこりしたように見えました。

『わたしはほんもののオバケですが、ココアがだいすきで
ときどきま夜中に、こっそりのみに出てくるのです』

オバケはカラフルなたくさんの毛糸でできていて、なんだかあったかそうです。

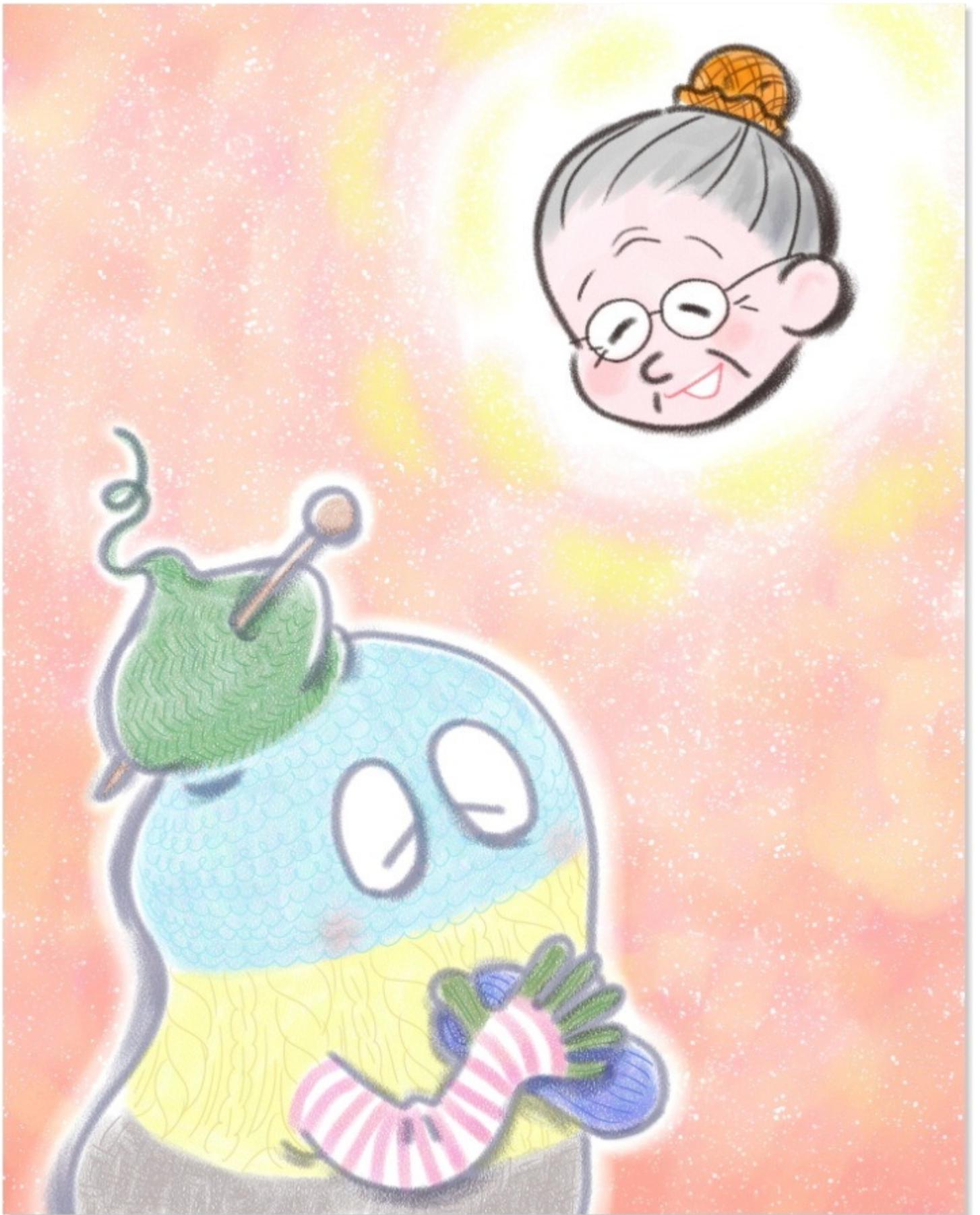


ルミは二人分のココアを入れました。
『ルミさんはひいおばあちゃんをごぞんじですか？』
と、おばけがきいてきました。
「わたしが生まれる前に死んじゃったから、会ったことはないけど
パパのおばあちゃんだよね」

『わたしはひいおばあちゃんのおんだあみものから、おばけになりました』



『ひいおばあちゃんは、あみものがとってもじょうずな方でした
冬になると家族のためにセーター、ベスト、ぼうしや手ぶくろ・・・
いろいろなものをあみました
次の年には小さくなったセーターをほどいて、マフラーをあんだけりました



『“もの”は大切にされると、小さなたましいが生まれます
もののたましいは、持ち主がこの世からいなくなっても
オバケとして生き続けるのです
それから、ぜんぜん大切にされなくて
悲しみのあまり、オバケになったりもします

ほら、ここ・・・』



オバケがゆびさしたところは、
今にもほどけそうにゆるゆるで、もようもまがっていました。
『ここはルミさんのママが、赤ちゃんのルミさんにセーターをあもうとして、
とちゅうでやめてしまったところです』

ママが何かを作ってるところなんて、今まで見た事ありません。
「ママが、わたしのために？」 ルミはそっと手をのばしてさわってみました。
なんだかむねのおくがスースーしました。



「あれ？ここどうしたの？」
よく見ると、下の方がほどけてきえかかっています。
オバケはとても悲しそうに
『これはねているときにネズミにかじられて、
そのあとねこに引っぱられたりして、どんどんほどけてきてるのです！

このままだと、わたしは消えてなくなります。
ルミさん、わたしを助けて！ここから下をあみなおしてください！』



「ねえ、ママ。あみものを教えてほしいんだけど・・・」

次の日、ルミはママにいちおう聞いてみました

「急にどうしたの？ママ、あんまりとくいじゃないのよ、あみものとか・・・」

ママはルミをつれて、ものおきになっているやねうらに上がり、

古い箱をあけて、中からあみかけのセーターを出しました。

たしかにそれはゆうべのオバケの足でした。

「これ、ルミが赤ちゃんのときにがんばってあんでたんだけど、
できあがる前にルミが大きくなっちゃって・・・
だから、だれかほかの人におそわった方がいいわ」
ママの後ろでオバケがうんうんとうなずきました。



学校でもずっとルミはオバケのことばかり考えていました。

すると前の席のすわっていた子のベストが目に入りました。

もみの木とどんぐりのもようのかわいいベストです。

あまり話したことがない子だったけど、休み時間におもいきってこえをかけました。

「ねえ、ナオコちゃん、そのベストすてきね。もしかしてだれかがあんだの？」

「うん、うちのお母さん。おさいほうとかあみものとかじょうずなんだ」
ルミは思わずジャンプしました。



さっそくナオコちゃんちに遊びに行くと、
やさしそうなお母さんがでむかえてくれました。
「どんなものがあみたいの？」と聞かれたので
「え〜と・・・お気に入りのぼうしがほどけちゃったので直したいの。
丸くくるくとあんでって、さいごにはすぼまるの」と言いました。

「それなら、かぎばりの方がかんたんね」
おばさんはあみめのひろい方、へらし方をくわしく教えてくれました。



夜中になって、ルミはこっそりやねうらにあがりました。
「もふもふさーん、あんであげるよ〜」と、小さな声でオバケをよぶと
古ダンスの中からオバケが出てきました。
『もふもふさんて、わたしのこと？』
「そ！いい名前でしょ？」

オバケはうれしそうにぴよんぴよんはねたので、また足が少しほどけてしまいました。

それからルミはひいおばあちゃんのゆりいすにすわって、

もふもふさんの足をあみはじめました。



はじめはやり方をわすれてしまったり、毛糸がこんがらがったり
なんどもまちがえてほどいたりしました。
さむさで指もかじかんでうまく動きません。
ルミはなきそうになって

「やっぱりむりだよ！わたしにはできない！」と、

かぎばりをゆかに投げつけました。

するともふもふさんが、ルミをくるんであっためてくれました。

そしてパパが小さかったころの話を聞かせてくれました。

「ありがとう。もう少しだけあんでからねるね」

ルミがそういと、もふもふさんはやさしくうなずきました。



ルミはまいばんやねうらにあがり、足をあみつづけました。
どんどんじょうずになって、早くあめるようになりました。
そしてとうとう、もふもふさんの足があみ上がったのです。
さいごのあみめに糸を通して、はさみで切りました。



みがるになったもふもふさんは、
大よろこびでへや中をグルグルととび回りました。
そのようすを見ていたルミも、とってもうれしくなりました。
いっしょにとび回れないことが、ほんとうにざんねんでした。



『ルミさん、本当にありがとう！
これでひいおばあちゃんに会いに行くことができます』
「え？どこかへいくの？もう会えないの？」
ルミはあわててオバケのうでをつかみましたが、
うではルミの手をすりぬけました。

『また会えますよ。きっと』

そういってもふもふさんは、古ダンスの中に入っていました。

「バイバイ。またね・・・」



ルミがそっとタンスのとびらをあけると、
中にはてぶくろや、毛糸だまが何こか入った
古いかごがおいてあるだけでした。



「おはよ～！ナオコちゃん」

「ルミちゃん、おはよう！あ！ぼうし直ったんだね。いいね～」

「でしょー！？ ね、またおうちに遊びに行ってもいい？

こんどはマフラーあみたいんだ。

また、おばさんにおしえてもらいたいの」

「わたしもいっしょにならおうかな～」
二人は笑いながら校庭を横ぎって行きました。

おしまい